

第 1768 回 (12 月 1 日)

1998 年のロシア農業

——経済危機の影響・「飢饉説」をめぐって——

野 部 公 一

本報告においては、1998 年のロシアの農業生産を検討するとともに、経済危機がロシア農業におよぼす中長期的影響を考察し、1998/99 年冬飢饉説に批判的検討を加えた。その要旨は、以下のとおりである。

1. 1998 年の農業生産

国家統計委員会の速報によると 1998 年のロシアの穀物収穫量は調整前重量 (パンカーウエイト) で、5,150 万トンに止まった。精選・乾燥を経た調整後収穫量 (クリーンウエイト) は、5～10% 程度さらに減少するのが通常であるから、最終的な収穫量は、4,700 万トン程度にとどまるものと見られる。これは、1997 年の 8,850 万トンを大きく下回るとともに、全面的集団化以前の 1928 年の 5,000 万トンをも下回っており、歴史的な低水準である。

このような記録的不作の直接的要因は、「1 世紀振り」の深刻な旱魃である。しかし、その背後には、経済改革開始以降、農業にとって不利な条件が続いたこと、その下で、農業生産者が「商品生産」を行なうというよりも「生き残りのため」の行動を取ったこと、その結果、投資は削減され、農業生産構造自体が、気象条件に大幅に左右される脆弱なものになったという事実が大きく影響をおよぼしている。

畜産部門に関しては、家畜頭数の減少および生産の減少が継続している。

2. 中・長期的影響

経済危機の発生、それによる為替レートの大幅な下落、および支払い危機の発生は、農産物・食料品輸入を事実上ストップさせた。経済危機発生の直前まで、ロシア国内の食料品は、もっとも控えめな計算でも 4 割が輸入品であり、それは漸次的に増加する傾向を示

していた。中長期的にみると、このような状況に歯止めがかかり、国内生産者が次第に輸入品から国内市場を回復していくものとみられる。

また一方では、経済危機は購買力の低下をもたらし、食料品、とりわけ畜産物の需要を減少させる。さらに、経済危機にともなった銀行システムの崩壊は、ようやく軌道にのりつつあった農業への特惠融資を崩壊させてしまった。

経済危機の中・長期的影響は、このように肯定的・否定的両面をもった複雑なものである。これが全体的にどちらの方向へ進むかは、今後の政府の政策により、大きく作用されるであろう。

3. 1998/99 年冬飢饉説をめぐって

旱魃および経済危機による食糧輸入の途絶から、1998/99 年の冬にはロシアで大規模な飢饉が発生するのではないかと、という風説が流れている。だが、これは、あまりにも現実を誇張した論である。1998/99 年の冬に関し言えば、分配上の問題から小規模かつ局地的な食料不足が発生する可能性はあるが、大規模な飢饉は発生しないものとみられる。

まず、穀物に関して言えば、1997 年の豊作により大量の在庫が存在している。また、1998 年の収穫量も、課税をさけるため、10～15% 程度過少申告されている可能性がある。これらを考慮すれば、国内需要は、小規模な輸入増により充足可能である。

さらに、大多数の住民は、自宅付属地・菜園・農園をもち、そこでじゃがいも・野菜・畜産物等を相当量自給しており、食料不足を最小限にいとめることが可能である。

とはいえ、ロシア農業は、気象条件によって、その生産が大きく左右される体質となっている。当面の危機はないものの、1999 年の結果によって、飢饉が発生する可能性は依然として排除できない。今後の生産動向を見守る必要がある。